







の作品らしいといえ、そこまでの話だ。ただ、長崎での高校の級友・榎本操（「映画のお仕事」をしているとされる）は、「家は爆心地付近にあって、あの日両親を同時に喪っていた。……高等学校時代、彼女は既に娘としてのしるしを失っている筈であった。従って性格は多少女らしさを失い、男のような一面を持つようになっていた」（十四章）。ここも、「従って」以下は、今げんざい前項とつないで語るには勇気がいる。男の私にはわからない。更年期を迎え、「もう女じゃないの」などと言いながら、きわめて魅力的なエロス（女らしさ）を漂わせる女性は多い。

ところで、透子は性的に奔放に生きる操を思いながら問う。そうした榎本操と自分とはどこが違うのか。榎本操は女としての肉体を失っている。自分は肉体こそ失っていないが、謂ってみれば、その替りに精神を失っているようなものではないか。……もうこの世に、汝の求める確かなものはないのだ。汝は汝の二つの眼で、この世のいつさいのものが一瞬にして崩壊し、一瞬にして跡形もなくなったのを見た筈だ。命あるものは亡び、形あるものは消え去ったのだ。見なければよかったが、汝は見ってしまったのだ。見てしまったということは、もうどうすることもできないことだ。

この「汝」と呼びかけるものは、いったい何者か？ 自らに由りて自らなる「神」にしては、少し小さすぎないか。これは、作者また作中の「透子」たちが抱く、上つ面の「神」でしかない。「この世に汝の求める確かなものはない」などと、「神」ならば口が裂けてもいっちゃならないぜ。だって、「ない」を謂わないことで、反語的に「確かなもの」の实在（ある）を予見させる存

在をこそ「神」とも言うんじゃないか。すべては肯定される。すべては赦される。

それに、「いかなることにも酔わない」透子は言う。「廢墟というものは好きです。……そこに残っている物だけが確かだという気がするんです。……この柱や、この土台だけが、絶対にどんな力にも壊されない確かなものだったんだという気がいたしますわ。他のものはみんな形を消してしまいました。……信じることができるのはこの何個かの石だけだった」（四章）。果たしてそうか。石が不変の象徴でとどまれるならそれでいい。しかし、巖でさえ打ち砕くおそるべき力の存在をイエスは示したはずではないか。「身を殺して靈魂たましひをころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ」（マタイ10・28）。「石」を信じることのできる透子はまだ救われている。だから、「一人の人に愛情を持つということが淋しい」（五章）、「自分は、なべて不純なものを取り去ってしまったあとの本当のものだけがほしい」（八章）などと、甘えた言葉も吐けるのだろう。

それにしても姉弟の会話のなかによく「神」が登場する。「要するに僕たちの相手は神だと思ふんだ。人間じゃない、神だよ。僕は神に聞いて貰うために、音楽を作っている。姉さんは神に見て貰うために、自分の愛を考えたらいいんだ。普通の人たちにはそんな必要はない。併し、僕たちにはある。いつでも、神の前に僕たちは引き出されているんだ」（十章）。はあ、そうですか。まあ、青臭い音楽家の科白だから許すとしても、恐るべき選民意識。付き合っていられない。そんなに「神」って、魅力的だったの？ そうだね、原爆投下だって、祝祭に変える力を持っている！